

いも九、いざ江戸へ：京・江戸・博多、そして巴里 ： 13

南野， 森
九州大学大学院法学研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/7182151>

出版情報：福音宣教. 77 (2), pp.10-11, 2023-02-01. Oriens Institute for Religious
バージョン：
権利関係：





2011年8月23日、第9期南野ゼミの東京研修旅行のひとこま。最高裁判所第一小法廷の櫻井龍子判事の執務室で。九大法学部出身の櫻井判事は、8年間、毎年南野ゼミの訪問を歓迎してくださり、最高裁の裏手にある上品なホテルのレストランで夕食会も催してくださった（2017年1月、最高裁を定年退官）。

弁護士事務所といった「私」の組織とを、2泊3日の日程で訪問する。九大法学部生は、私の観察によると、根が真面目で、打てば響く、潜在能力の高い好人物が多い。ところが周囲に同じような雰囲気のある大学が多くなき、また東京一極集中の世の中で、どうしても「地方でのんびり」してしまう傾向がある。昔から九大生は自分たちのことを、田舎くさい、垢抜けないイモ学生という意味で自虐的に「いも九」と呼んできたが、それはそれで良い点も多々あることを承知のうえで、私は学生たちに、都会に負けるな、ここには「地の不利」がある、意識して自分の世界を広げろ、と言ってきた。そして文字通り見聞を広める効果を期待して、15年前からこの東京研修旅行を企画してきたのであった。

訪問先は、私が直接・間接の知り合いを頼って調整するが、ときには、ジャーナリストの田原総一朗氏に会っていただいた時がそうであったように、まったく面識のない方にゼミ生と会ってもらえないか交渉することもある。最高裁判所に九大法学部卒の櫻井龍子判事がおられた8年間は、毎年可愛い後輩たちのための大サービスで、最高裁内部での面談のみならず、なんと裁判所近くのレストランで夕食会まで開催してくださった。世の中にたくさん法学系のゼミはあるだろうが、最高裁判事と毎年宴席を持つゼミは、南野ゼミだけだったかもしれない。

ゼミ生のなかには、このような名物企画に惹かれて入ってきた者もいただろう。なのに2年連続で実施不可……。それが、ついに2022年11月、3年ぶりに再開できたのである。2020年4月に入学した学生も、11人いた。



みなみの・しげる●九州大学法学部教授。京都市生まれ。洛星中・高等学校、東京大学卒業後、同大学大学院、パリ第10大学大学院を経て、2002年九州大学助教授、14年教授。AKB48の内山奈月との共著で好評を博した『憲法主義』（PHP文庫）ほか著書多数。



京・江戸・博多、そして巴里

南野 森●憲法学者

13 いも九、いざ江戸へ

コロナ禍により我々の生活が大きく変えられるようになってから、ちょうど3年が経った。本連載の昨年2月号では、その2年前、2020年4月に入学した学生たちが特に気の毒であったこと、本来楽しいことがたくさんあるはずの大学生活がオンライン一辺倒になってしまったことを書かせていただいた。

大学や学部により状況は異なるであろうが、九州大学の法学部は、幸いなことに、ようやく今年度の後期になって平静を取り戻せたように思える。少人数のクラスはもちろん、大教室での講義も原則として対面で実施し、その結果、教室のみならず、食堂にも図書館にも、キャンパス中に学生が溢れる姿を見ることができたのは嬉しかった。11月には3年ぶりに大学祭も開催できた。

より個人的なレベルで言うと、私が担当する憲法ゼミも、3年ぶりに「東京研修旅行」を実施できた。九大法学部のゼミは、少人数教育を売りにしており、どのゼミも3・4年生を合わせて20名以下に抑えるのがルールである。そして1年間、同じメンバーで、私のゼミであれば憲法に関連する判決や学説、あるいは社会問題などを題材に、ロの字型に机を配置した教室に週に1度集まって議論をする。時には議論が白熱し、外が暗くなるまで延長戦ということもある。

ゼミ後の食事や合宿など、純粋な学問とは異なる「付き合い」も重要だと私は考えていて、そのような課外活動に積極的なことも「南野ゼミ」の特長となっている。そして毎年恒例のいくつかの企画のうち、質量ともに最大なのが東京研修旅行。国会、中央官庁、最高裁判所という「公」の機関と、マスコミ、民間企業、